The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	書物形成法における一考察 ： 『吾輩は猫である』を手がかりに
Author(s)	吉羽, 一之
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56368
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書物形成法における一考察
――『吾輩は猫である』を手がかりに ――

吉羽一之／千葉商科大学

はじめに

書物は，その書物が制作される時代の技術的な制約の中で形成されてきた。デジタル環境での制作が主となった現代では，出版面での制約はあるが，活字やそのサイズなど，選択の自由度は高い。しかしその選択理由は，制作者の主観によるものや識字能力に頼った，言わば読めればよいといったものが多く，明確ではない。

本発表は，書物がどのような環境で，どのように読まれるのかという観点と，人間の眼球能力における認知心理学的な見解をふまえ，理論的な形成法の一考察を試みる。

調査対象の選択条件と分析手法

書物に掲載されているテクストは多種多様であり，形成において考慮しなければならない構成要素もまた多岐にわたるため，書物形成法の一考察のための調査対象として，日本に洋装本が伝播された明治以降の書物形成と読書環境との関係性に着目し，長い刊行歴と広い読者層を条件に，夏目漱石『吾輩は猫である』（以下『猫』）を選択した。また実測調査は読書において主となる本文紙面を中心に行った。『猫』は現代に至るまで様々な形態で刊行されているが，本発表では，それらの中から，明治38（1905）年大倉書店刊行の初刊本，昭和５（1930）年岩波書店刊行の再刊本，最新刊（2013年時点）平成23（2011）年文藝春秋社刊行の文庫本の３点を取り上げ，本文紙面の分析と，それらが刊行された時代情勢と読書環境の調査を行い，書物形成と読書環境との関係性を考察した。

初刊本分析

初刊本は上中下の３冊分冊で刊行され，明治38（1905）年から刊行が始まり，発行所は大倉書店と服部書店の連名で，印刷は秀英舎で行われている。定価は上編が95銭，中編と下編が90銭である。当時の物価は阪神電車の大阪神戸間の運賃が20銭，米が白米中級品10kgで１円17銭７厘，かけうどん・かけそばが３銭５厘，銭湯が大人一人３銭である。当時の物価から，初刊本の価格の印象は高価なものだったと言える。

初刊本の実測分析は日本近代文学館の復刻本「新選名著復刻全集」を用いる。タイトルは漢字カタカナ表記，判型は上中下ともに148×225mmで，装画は橋口五葉が描いたものである。紙面に対する版面の位置を計測したところ，中編の地のマージンは上編・下編に比べると広く，紙面の上方に版面が配置されている。が，上編・下編は紙面のほぼ中央に版面が配置されていることから，版面の位置に意識的な配慮はなかったと推測できる。

使用されている活字サイズは，上中下ともに５号，活字書体は上中下ともに秀英舎の明朝五號である。字間は上中下ともに四分アキという設定がされているが，この設定の理由として，仮名の筆脈が損なわれずゆったりと読めるということと，四分のスペースと四分の約物活字を入れ替えることで組版作業の簡便化を計るという２点が挙げられる。行間は上中下ともに全角アキで，誤読を避ける，ルビ活字を挿入するという理由が考えられる。

行数と字数は，上編・中編が１行32文字詰め，１頁14行，448文字，下編も１行の字詰

めは上・中と同じだが，行数は１頁13行で他編より１行少なく，字数は416文字となる。これは下編全体の掲載文字数が少なかったため，他編よりも行数を１行少なく設定することで，３冊が同じような頁数，厚みになるように設定されたものと思われる。

次に初刊本が刊行された時代の情勢を概観すると，明治38（1905）年４月，早稲田大学野球部が日本スポーツ界初の海外遠征を行い，阪神電車が大阪神戸間を20銭の運賃で開業したことなどが挙げられる。また前年から勃発した日露戦争における快勝に大衆が浮き足立つ中，同年９月に調印されたポーツマス日露講和条約に対して反対派の暴動が全国に広まり，生活環境向上の反面，安定した治安とは言い難い時世であったと思われる。出版業界では，明治４（1871）年文部省の設置やそれに伴う学校制度の発布で，読書の対象となる書物が娯楽本から啓蒙書や思想書へと拡大していく。また洋装本の製本技術の向上や，印刷技術，用紙，活字の洋式化によって，書物をより廉価で製作することが可能となり，多くの読者が登場することとなる。また活版印刷の技術向上に加えて，鉄道による輸送手段が日本の主要都市から地方まで広がり，多くの新聞が刊行され，広く普及していくことで情報の受容が拡大する。そして，これらの新聞の中には，より多くの読者を確保しようと連載小説を掲載するものが登場する。一方，特定の読者を対象としたものだけでなく，幅広いジャンルを含む『太陽』に代表される総合雑誌も多く刊行されている。

これらの情勢調査に加えて，明治の読書環境を視覚的に知るため画報の調査を行った。明治22（1889）年創刊『風俗画報』の中から，東京図書館や帝国図書館，新聞や雑誌が読まれている図を調査したところ，読むということにおいては和装本が中心，読者層は男性だけでなく女性そして子供にも拡大していること，また図書館で，自宅でじっくり座って読む，新聞や雑誌は「ながら読み」されていることなどが確認できた。

再刊本と文庫本の実測分析と読書環境についての調査は，初刊本と同様の手法で行った。再刊本の読書環境についての調査には小津安二郎監督『東京の女』という映画の中で描かれている読書風景を用いた。また文庫本の読書環境の調査にはNHK世論調査部発表の『日本人の生活時間・2010』を用いて読書時間についての検証を行った。

おわりに

調査と考察の結果，初刊本は書物の形成が読書環境を導き出し，再刊本は書物の形成と読書環境が互いに影響し合い，最新刊の文庫本は読書環境が求めた書物が形成されていることが明らかになった。つまり明治後期から現代に近づくにつれ，読書環境に合わせた形成に重点が置かれていく流れを見ることができる。そのことから読書に適した書物には，読書環境に合わせるだけではなく，読書環境を導くための形成が必要だと言える。

本発表ではこれらの考察に加えて，今井直一著『書物と活字』を取り上げ，本文紙面と活字サイズにおける眼球能力の適性について言及したが，人間の行動には習慣性が大きく影響するため，適性と習慣性を相互に検証しなければならない。今後は，本発表の『猫』の紙面分析に加え，それぞれの『猫』が刊行された同時期の刊行物の紙面を分析し，各時代の読書環境を明らかすることを課題としたい。